

容赦ない自然の脅威の3. 11大震災から、また、最悪事態を想定せず、重大事故に繋がった東電第一原子力発電所の事故から九ヶ月が過ぎました。

今般、校友会本部より、全国各地の校友会の皆さんの温かなご支援の義援金から多額の支援金を再度頂きました。本当に有り難いことで感謝の念で一杯です。被災校友に代わりまして心から感謝申し上げます。

全国校友の皆さんの暖かいお心・ご配慮は被災校友・ご家族の心にしみるものと信じております。皆さんの、被災されました校友への思いを受け、被災の状況等を考慮し義援金をお届け致しております。

今、校友を含めて被災された皆さんは、県内各地に建設された仮設住宅、親類宅等を仮の住まいとしましたが、不安な日々を送られていると思います。仮設住宅の地は、これから本格的な降雪の時期となります。降雪のない浜名通りからの避難故に、厳冬・寒さへの対応・不安、スタッドレスタイヤの準備、圧雪・凍結道路での自動車運転の不安、働ける職場がない等不安で落ち着けない毎日となっております。大津波襲来地と重なる東電第一原子力発電所事故での警戒区域、計画的避難区域の被災者は、いつになったら故郷へ戻れるのか、もう戻れないのかなど精神的不安にさいなまれる日々となっております。また、隣の山形県への1万5千名余を含めて約15万名余の日本全国の都道府県に避難されている被災者は、身寄りのない慣れない地での不安な生活、県内避難者同様の不安で落ち着けない毎日かと推察しております。

原発事故による放射線への心配、不安、恐怖は、警戒区域等指定された避難区域以外からの自主避難者が、53,270名に上ることからも推察されます。電話で被災、避難確認をしておりましたら、関西地域に避難されたある女子校友は、東電、政府は情報を小出しにしている、最初からきちんとした情報を出してくれば異なった対応ができたのに、と不安な心情を話されました。県校友会として、不安な状態におかれた校友の皆さんに精神的な支援はできないか、考えなければと思っております。

今後の生活再建への道のりは、いろんな障害が待ち受け厳しいものがあるかと思いますが、義捐金に込められた物心両面の復旧・復興を思い願う全国校友の皆さんの心が、明日への活力、エネルギーへと繋がることと思います。「未来を信じ、未来に生きる」の立命館精神で、笑顔の日々が一日でも早く訪れますことを願い祈り、校友会のご配慮に感謝申し上げ御礼と致します。

敬具

平成23年12月14日

立命館大学福島県校友会会長 富田 良夫

立命館大学校友会会長 山中 諄 様